

南三陸ノート（4）

杉田 孝夫

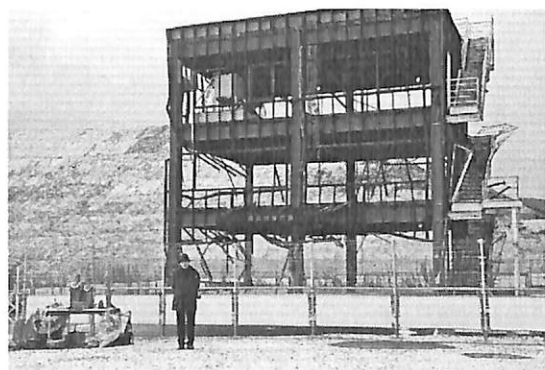
はじめに

1. 戸倉小学校再開
2. 町立南三陸病院の開院
3. 平地の嵩上げと町づくり
4. 災害公営住宅・防集団地・住宅造成工事の進捗状況
5. 最年少新人町議会議員の誕生
6. 入谷の農業 女性がつくる
7. 山林の管理
8. NPO

むすび

はじめに

今年（2015年）で震災から5年目の年になる。志津川や伊里前など地域の中心であった低地被災地域の嵩上げ工事は、訪れるたびごとに道路の付け替えがなされ、盛土の景観も変化しており、作業が進んでいることは分かるのだが、盛土の山の間をダンパーが行き来しているだけの風景なので、復興の実感はそれほど感じられない。そんななかで、戸倉小学校の再開と南三陸病院の竣工と開業は、復旧復興の印となる今年度のもっとも明るいニュースだった。



防災庁舎 2015年12月27日

1. 戸倉小学校再開

折立の戸倉長須賀にあった戸倉小学校は、海岸から200m付近に位置していたが、3階建ての校舎屋を超える津波が来襲し、できたばかりの体育館とともに全壊してしまった。2年前までは残骸がそのままあったが、今は解体撤去され、当時をしのぶものは、いまはない。ここでも嵩上げ工事がすすんでいる。震災のとき、教職員と子供たちはいち早く第

一次避難場所になっていた宇津野高台に避難し、津波の来襲を見て、さらに高台にある五十鈴神社に避難し、なんとか全員無事だった。高台にあったアパートや車は流され、津波は高台の杉の木の5mの高さまで、神社の鳥居のすぐ下まで押し寄せたという。神社は30メートル程の高さと思われる。震災の夜は、雪が降り、寒かったが、4年生以下は神社の社屋の

なかに泊まり、5、6年生と大人は外でたき火をしながら校歌などを歌って夜を明かしたという。震災の後、2011年度は旧登米市立善王寺小学校で授業を実施し、2012年4月1日からは南三陸町立志津川小学校に間借りして授業を行ってきた。子供たちはスクールバスで登下校してきた。



戸倉小学校新校舎 2015年12月26日

新しい校舎は旧校舎より約1km内陸、志津川湾を望む高台に造成された戸倉地区防災集団移転団地に隣接する区域に造られた。新校舎は2015年8月31日に完成し、10月4日から新校舎で授業を開始した。

2. 町立南三陸病院の開院

公立志津川総合病院は震災前、10科、一般病床76床、療養病床50床、職員110人の病院として地域医療の要となって住民の健康管理を担っていた。チリ地震津波のとき津波が2.8mに達したことを教訓に、沿岸には高さ5.5mの堤防が築かれ、5階建ての病院は、6mを超える高さの3階より上に病室を設置し、屋上は津波避難所に指定していた。しかし2011年3月11日の東日本大震災では、4階部分まで津波が襲い、4人の職員と屋上に避難しきれなかった入院患者109人中67人が、津波に飲み込まれた。

児童数は69名である。すぐ隣には<戸倉地区子育て支援拠点>戸倉保育所も造られている。

戸倉中学校は戸倉小学校よりは高台にあったが、グラウンドと建物一階は津波に襲われ、1年生の男子と教諭の2名が犠牲となった。震災後5月10日から登米市の廃校となった校舎で2011年度の授業を開始した。翌年2012年3月10日は、生徒の要望で、津波の被害にあったもとの校舎で卒業式を行った。戸倉中学校は2014年3月31日で閉校し、志津川中学校に統合された¹。ともかく町内の初等中等教育の施設とシステムは一応復旧したといえる。しかし少子化の傾向がさらに続けば、十数年後に再び小学校の廃統合の問題に直面する可能性は排除できない。震災復興を地域の実力に見合った長期的な地域再生計画に連動させなければならないが、そのさいどのように教育環境を整え、どのような教育を行うかは、きわめて重要な課題である。保育・教育環境がどの程度整っているかは、若い世代の住民が住み続けたいと思えるかどうかを条件づける要因の一つである。

また約150人が津波から逃れはしたが病院に取り残され、そのうち翌日からの救助に間に合わなかった患者7人が亡くなった。

震災後3月27日にイスラエル軍災害派遣医療チームが志津川に入り、避難所となったベイスайдアリーナのそばにイスラエル医療センターを開設し、4月10日まで医療救援活動を行った。同チームが撤退した後、施設と医療器具等を譲り受け、4月15日から公立志津川病院仮設診療所が開設された。志津川病院の医師、町内医師のほか東北大病院、国境なき

1 現在南三陸町の小学校は、志津川小学校、戸倉小学校、入谷小学校、伊里前小学校、名足小学校の5校、中学校は志津川中学校と歌津中学校の2校である。

志津川小学校、戸倉小学校、入谷小学校の卒業生は志津川中学校に進学し、伊里前小学校と名足小学校の卒業生は歌津中学校に進学する。中学の卒業生の多くは、町内にある県立志津川高等学校に進学する。

ちなみに南三陸町内にある幼児保育教育施設は、町立認可保育園が3園（志津川保育所、戸倉保育所、伊里前保育所）、町立名足保育所・私立入谷ひがし幼稚園（これらは2016年4月から認定こども園となる）、私立あさひ幼稚園、ほかに2016年4月から地域型保育事業所（事業所内保育）になるマリンバル保育園がある。

医師団医師らが外来診療を行った。

災害派遣医療チームの大半が4月末までに撤退することになった。町は南三陸診療所と改称して、継承するとともに、6月1日からは登米市立米山病院の一部を無償で借り受けて臨時的公立志津川病院を開設し、医師3人、看護師30人、一般病床27床、療養病床12床で運用を開始した。町内の医療看護体制は震災前と比べ著しく脆弱となった。病院を震災以前の規模で再建することは、復興復旧計画の見通しが立たない段階では、財政的にも厳しいものがあり、将来に対する不安も大きかった。

今回の病院再建は、中華民国紅十字会総会（台湾赤十字）から日本赤十字を通じて、病院再建資金として22億2千万円の義援金の申し出があったのが大きなきっかけとなったようだ。総工費56億円の4割を占めている。



南三陸病院記念碑 2015年12月26日



南三陸病院 2015年12月26日

南三陸病院は、10科病床数90床で、震災前の公立志津川総合病院とほぼ同規模で再建が成った。総合ケアセンターが併設され、そこに保健センター、地域包括支援センター、子育て支援センター、南三陸町保険福祉課が入るほか、民間の地域活動支援センター、ボランティアセンターも入ることになった。このことによって南三陸町の医療・保険・福祉の拠点が有機的に再構築されることになった。今後の復興計画の推進にとって重要な関門を一つ超えたといえる。11月25日落成式が行われ、12月14日開院した。南三陸町周辺の市立町立病院は、気仙沼に市立気仙沼病院（15科）、登米に登米市立登米病院（13科）登米市立米谷病院（5科）があり、石巻には、日赤石巻病院（26科）、市立石巻病院（6科）がある。診療範囲は病院相互の連携を強化すれば、おおむね地域医療の必要を満たす水準にあるといえる。とはいえ南三陸病院の常勤医は現在3名であり、さらに数名の常勤医を必要としているというのが現状である。

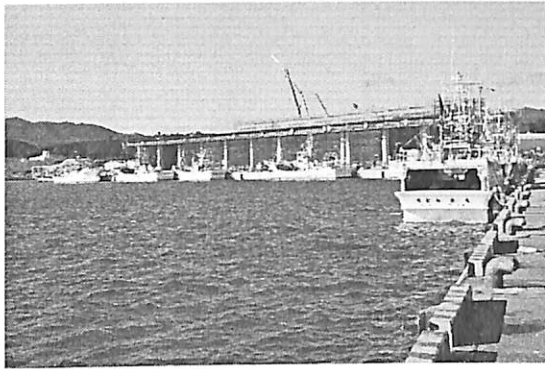
3. 平地の嵩上げと町づくり

志津川地区の平地は目下急ピッチで嵩上げ工事が進行している。

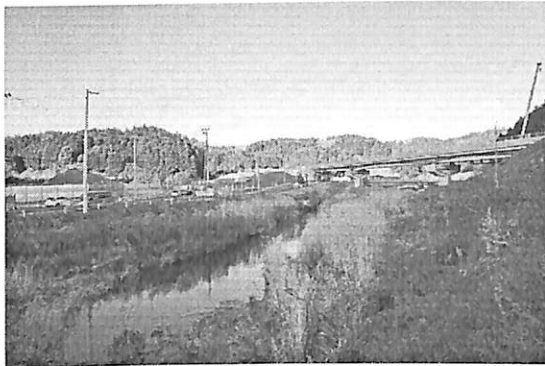
三陸道南三陸インターの工事は、本年度末までに完成の予定だったが、みとところ少し工事が遅れている様子である。これが完成すれば、志津川から仙台まで自動車道で行けることになる。なにかと便利になる。町の復興がこれとうまく連動するとよいのだが、そのためには、嵩上げ工事が早く終わり、次の町づくりが具体的に進むことがなにより重要だと思われる。役場で得た情報では、東北道と三陸道を



志津川港近くの嵩上げ工事 2015年12月26日



志津川港魚市場工事 2015年12月26日



志津川ICと八幡川 2015年12月28日

登米経由で接続する道路計画が着工したという。これが完成するのはだいぶ先のことだろうが、そのころまでに平地の街が新しい姿で出来上がっているとよいのだが、現状を見る限り、それまでにまだ数年を要するだろう。

町づくり計画の進捗状況を役場で、復興市街地整備課内海利洋さん、企画課制作調整第2係主事阿部克浩さん、復興市街地整備課主事吉田昇さんから聞いた。

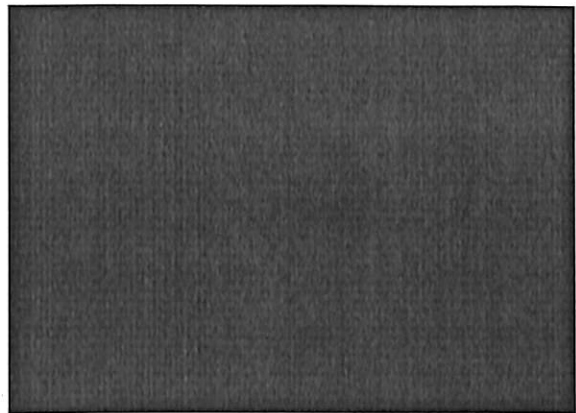
志津川地区の低地部の公園エリアの民地と商店・製造業エリアの町有地とを換地し、事業所（商店）の街としてのまとまりをつくることになったそうだ。低地部の換地は98%まで済んでおり、2017年度に引き渡し、2018年度には登記・清算金払いという段取りになっているとのことである。

現在の「さんさん商店街」があたらしくつくられる「道の駅」へ移転するのは2017年3月の予定である。当初計画では復興記念公園は24haだったが、結局は6haに縮小することになったという話も伺った。少しずつ現実的な復興計画へと修正されてき

ていることがわかる。

商店街の経営者側は、こうした状況にどう対応してきたのか、震災のダメージからどう立ち上がってきたのか。

さんさん商店街の阿部茶舗店主阿部忠彦氏、マルセン食品社長の三浦洋昭氏に話を聞いた。阿部さんは現在南三陸志津川復興名店街運営組合長であり、三浦さんは南三陸まちづくり未来代表取締を務めている。



二人とも震災後の小学校での避難所暮らしが現在の活動の原点になっているように感じられた²。

傍目にはつらい時間だと思える避難所暮らしなのだが、「ある意味楽しく過ごした。仕事を考えることなく、その日その日のことを行なった。」というのは、三浦洋昭氏である。震災の年の4月に復興市を4人で立ち上げ、4月28日、29日に第一回日を行った。それから毎月一回日曜日に開催し、これまで51回続いている。この復興市を中心にして、震災前からのイベントを継承してきている。例えば11月の産業祭りなどである。震災後最初の年にこうした活動

が基礎となって、さんさん商店街の立ち上げにつながった。その間に、行政と商店会との間の情報共有が出来上がっていったという。さんさん商店街の構想は5月頃に生まれたようである。中心になったのはしのやの主人と同級生たちだったようである。三浦さんは6月には移動販売車で従業員をつなぎながら、買い物環境の手助けとなる工夫をした。消防署・県合同庁舎・町営住宅などがあった町所有の土地をつかうことができたことも、さんさん商店街の開設に幸いした。最初の2年は三浦さんが組合長となり、その後阿部さんがバトンを受けた。この段階で将来の商業区域の本設に向けて、その準備として商業復興策定委員会が組織されたこともあり、若手にバトンタッチとなったということのようだ。商店街のメンバーは現在30軒だが、一人一役で、衛生、防犯、防災を組織的に管理している。

売り上げは9割以上が震災前よりも伸びているらしい。当初は地元需要を念頭に置いていたので、外からの客の多さは想定外であったという。その後対外的販売戦略の強化を積み上げたことが功を奏したと分析している。昨年がピークで、今年度は若干落ちているという。ポータルセンターと商店街との連携を重視し、発信も行っている。ポータルセンターと商店街のテントは救世軍の支援によるものであり、それについてはNPOの紹介をしてくれたこととともに、非常に感謝しているようであった。そのほかにもたとえば中小企業診断士の団体による「笑顔プロジェクト」という支援など、かずかずの支援に支えられてここまでやって来れたと話してくれた。岡山NPOが中心になって企画運営している復興グルメグランプリは年3回岩手から福島までの15チームが参加して行っているが、これは参加主体の情報交換が主目的であり、復興の大きなバネになってい

るという。

さまざまな地域に視察に行き学習と情報共有の努力も重ねている。

課題となっている道の駅をどのように運営するかについても、先進事例を積極的に学んでいるようだ。山口県萩のシーマートからは多くのヒントを得たという。運営が地元でかつ組合組織によるとか、観光客だけでなく、地元の人が立ち寄る道の駅になるための工夫など、どんな道の駅になるのか楽しみである。

さまざまなキャッチフレーズが話の中で飛び出した。「シルバー世代をターゲットにした交流人口の確保」(つまり中高年世代の観光客の確保)、「持続可能な町は小さくて美しい」「地産地消」「国際基準の杉の育成」「バイオマス」「一次産業からの地域づくり」などどれも魅力的であり、可能性も大きいものであるが、長い時間をかけて改良を重ねて初めて結果がでてくるものばかりである。最大の課題はそれを担う人が現れることであり、かつその人々が有機的に連携して価値の創出を担っていくという連帯の意識を涵養していくことのように思われる。

三浦さんが興味深いことを話してくれた。「自分は、同族企業で終わらない企業、誰かが継いでいける企業を目指している。30代、40代の、商店で働く者、工場で働く者が、連携するための勉強が必要だ。それぞれの立場で何ができるか、何をするかを考え、学び、それを共有することだ。誰かがやりたくなるような会社をつくることだ」と。そして「立場が人を変える」とも。

最近では産業祭りの一環として地元企業のブースを設けて、10社ほど企業PRをしてもらい、町民に知ってもらう機会を設け参加してもらうようにしているという。企業拡大、雇用機会の創出につながる

2 阿部忠彦さん、三浦洋昭さんたちの、志津川小学校避難所での活動や当時の様子は、未来共生プログラム2014『志津川小学校避難所記録保存プロジェクト 中間報告』(大阪大学未来戦略機構第5部門 未来共生イノベーター博士課程プログラム編集発行、2015年3月)にまとめられている。歌津や戸倉の避難所の様子も、このような記録に保存されているのだろうか。南三陸町のどの避難所、仮設住宅でも自治会が組織されて、危機をしのいだはずである。被災当時のそれぞれの地域の活動が、記憶が薄れないうちに、このような記録に保存されることが望まれる。その体験と記憶は、いまから始まる災害公営住宅や防集団地での新しいコミュニティのありかたを考える上での有益なヒントになるはずであり、同時に後世に伝えるべき地域の歴史資料でもある。また今後予想されている東南海大地震など類似の災害が起こったときに被災者たちがどう動けばよいかを考えるさいの、有益な参考資料になるはずである。

試みであり、高校にも授業の一貫として参加してもらうように依頼しているという。南三陸からの通勤圏である登米のリコーや村田製作所にも参加してもらうように交渉しているようだ。こうした形で社会教育連携や地域間交流を進めることによって、それらの積み重ねによって、長期的に人口減少や人口流出抑止につながっていくのではないかと、という考えである。小さな単体のなかで、しかもそのなかで

個別的にしか考えることができず、結果としてマイナス思考に陥るというパターンから脱して、隣接周辺地域をも射程に入れて、連携して取り組み、プラス思考を重ねていくというパターンである。これは実際やって見たことがある人間にしか分からない感覚だと思うが、そのような人たちが、南三陸にいるということに、この町の今後の可能性を感じる。

4. 災害公営住宅・防集団地・住宅造成工事の進捗状況

仮設住宅から復興住宅や、防集団地に移る人が出ており、これから仮設住宅は空き家が目立つようになってくる。他方さまざまな事情でなお仮設住宅に残らざるをえない人もいる。空き家をどうするかという問題となお仮設住宅住まいの人々の安全と健康をどのようにケアしていくかという問題は、今後重要な行政課題となるが、現段階での町の方針は、2017年度以降、仮設住宅の整理集約を開始し、まず学校敷地内にある仮設住宅から着手する予定ということである。2017年度から整理集約を開始するというのは、仮設住宅は建設からすでに5年が経過し、イタミ、老朽化が進んでいるが、あと1年程度は現状のままでなんとかかなる、という判断にもとづくものであるようだ。

住宅造成工事も東地区、西地区は引き渡しが入り、2016年春から住宅建設が始まる。もっとも戸数の多い中央地区も申し込みが開始されたということである。



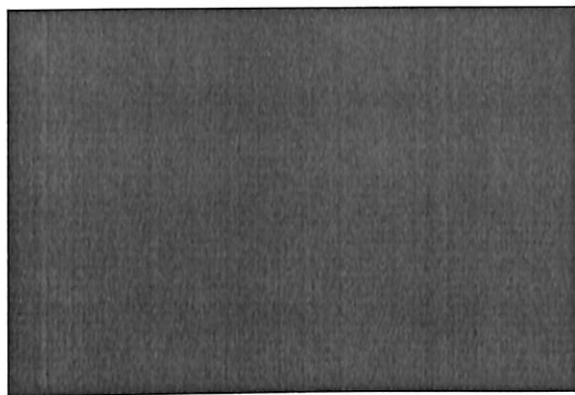
平成の森団地から枡沢団地遠望 2015年12月27日

高齢者の見守り、訪問などのボランティア活動の拠点になる福祉的モールの計画も検討されているという。また町内の社会教育活動の公共的環境整備の一環として生涯学習センター基本構想に関する要望書が町づくり協議会から出され、それについての検討も進められているという。これらは、交通インフラ、商工ゾーンの確定、住生活拠点整備が一通り目処がたち、町民生活のソフトインフラの整備に移り始めていることを窺わせる。

5. 最年少新人町議会議員の誕生

この前の町議会議員選挙で、目立ったのは30代で初当選した議員がいたことであった。後藤伸太郎議員（37歳）である。6歳まで多賀城市で育ち、小学校一年から南三陸町で過ごし、高校・大学は仙台で過ごし、高校・大学では応援団だったそうだ。大学は中退し、東京に出て舞台俳優を志願し、劇団に入ったが、2010年末に実家がある志津川に戻り、2011

年2月1日から仙台で働き始めて、ひと月後、仙台で震災に遭った。家族と再会できたのは2日後の13日だったそうだ。家族は家があった元浜地区から上ノ山そして小学校に避難し、2ヶ月間小学校の避難所で過ごし、そこで避難者600名ないし800名からなる自治会を結成し副会長を務めた。二家族で一班を編成し、避難所の基礎単位として、運営した。志津



川小学校の避難所は、みんなで支え合って生きていくという雰囲気が始めからあったそうだ。志津川の町場の古からのつながりが、そういう雰囲気を自然に生み出したのだろう。歌津の小学校の避難所や平成の森の避難所の雰囲気と類似のものが感じ取れる話である。後藤さんは震災の年の8月に小森の仮設住宅に移り、現在もそこに住んでいる。

議員への道のきっかけはやはり避難所生活での体験にあったようだ。お世話をしているようで、いろいろなものをもらったという。「3月27日あたりだったか、小学校の卒業式をしなければならないということになり、掃除衛生担当の指揮であったという間に片付いたという。同じように入学式もすこし遅れはしたが4月だったか5月に行われた。だれも文句を言わなかった。大人から子供まで積極的に協力的だった」。それを見て「田舎も捨てたもんじゃない」「やれることがあれば、できればいいかな」という気分になったという。

震災から一年後、自分より4歳下の弟の世代が「南三陸復興青年会」（会長工藤大樹さん）を結成し、復興市の手伝いなどを始めたが、若い世代の意見をどこにどうやってとどけたらいいのかという問題にぶ

つかるなかで、10年、20年、30年先の南三陸、自分たちが生きていく世界をどうつくっていくか、という観点からいろいろな物事を考え始めるようになったという。

そんななかで町議会選挙に出ることになったが、「当選するために何をしようか」という気分はまるでなかった。落選してもしようがないという気持ちで、開き直って向かったという。ほとんどの仮設住宅を回って話をし、地縁血縁ではないかたちで、自分の可能性を、自分自身を評価してくれという気分だったという。選挙活動にインターネットを使った最初の候補者の一人ではないかと思われるので、聞いてみたところ、その効果の実感があったという。

議員生活2年を経て思うことは「無茶はできない。分かったうえでバランスをとってやらなければならない。考え方の違う人とも付き合っていかなければならない。その意味で自重し、つぎにつなげるということが必要なのだということを学んだ」と振り返る。議会の様子について「議員同士で意見を戦わせる機会が少なく、議案上程は町側で、議員は議案に対する質問をするだけ。議案をどっちにしようかという、議員間の討議はない」という状況に若者らしい不満を述べてくれた。これは全国各地の議会の平均的姿である。後藤さん自身は「一般質問の機会を積極的に使い、議案の中身をもっと勉強する必要がある」と述べるとともに、議員としての役割を「問題を発掘し、問題化することにある」とその覚悟のほどを示してくれた。

今後議員としてどのように経験を積んでいくのか、楽しみな人物である。

6. 入谷の農業 女性がつくる

震災直後から気になっていたこととして、農業の復旧復興という課題がある。町のデータによれば、農地の復旧対象面積246haのうち復旧工事対象面積は224haで、すべて着手済みということだが、完成済みは73.5haで、残りの150.5haは、2016年度末まで

に完了の予定ということである。農地の復旧の進捗状態がそれほどはかばかしくないことが見て取れる。水稲作付面積は震災前285haだったのに対して、2015年度作付面積は145haである。農業従事者の高齢化なども影響している。他方園芸作物関係に関

しては、3.3haが復旧し、ハウス施設も61棟が復旧している。内訳は菊1.5ha／12棟、小松菜1.0ha／33棟、いちご0.6ha／8棟、ほうれん草・きゅうり0.2ha／8棟などとなっており、換金作物の復旧ぶりが目につく。津波の被害の大きかった大雄寺周辺の田尻から竹川河原にかけてのハウス群がほぼ復旧したことはおおきな進捗である。今後さらに特産品を増やし、園芸作物をさらに拡大できるかどうかが今後の課題である。

南三陸町の農業はほとんどが兼業農家で、農業収入だけでやっていける規模ではない。世帯収入という観点から見れば、戸倉地区や歌津地区は昔から農林業と漁業の兼業であり、農業の入谷地区といってもやはり第二次産業や第三次産業の業種との兼業である。兼業の質をどのように上げていくかをもっと積極的に考えるべきであろう。また特産品の生産、加工、流通販売ネットワーク化、いわゆる六次産業化の可能性をもっと追求すべきであろう。そこで考えるべきは $1+2+3$ ではなく、 $1\times 2\times 3$ の発想ではないかと思う。ネットワーク化と真の協同によって、目先の利益に振り回されることなく、長期的な展望に立って、リスクとコストを減らし、利益を増やし、生活の充足感を生み出す方法の開発である。ゆたかで穏やかでしかも生気に満ちた地域を造っていく上で、最も基本となる考え方である。

その問題を考えるうえで、可能性を感じさせる新しい動きが入谷地区でも始まっている。入谷を元気にするために、グリーンツーリズムやさんさん館（旧林蔭小学校校舎を利用した宿泊施設）の運営を十数年前に始めたのは現在町議会議員をしている菅原辰雄さんだった（現在は宮城グリーンツーリズム推進協議会の会長を務めている）。そのころから入谷の里を桃源郷のようにできたらいいなと語っていたが、最近入谷桃源郷構想が動き出したという。グリーンウェアのメンバーが中心になって、町有地や民地に苗木を植えて四季折々山里を花木でいっぱいし、地元の人はもちろん外から訪れる人を和ませるような環境づくりをやろうという試みである。南三陸町全体をツーリズムの拠点にしようという動

向に先駆けて、まず中山間部の入谷をそれにふさわしい場所にしようという入谷地区住民の心意気が感じられる。こうした動きが各地区に伝播し、それが結びついて町全体の構想となって環境整備が行われるようになったとき、はじめてグリーンツーリズム（山）とブルーツーリズム（海）が合体して、南三陸の観光資源が有機的に統合され、外観的にもおおきなインパクトをもつようになるであろう。今回の苗木の植林はその新しい第一歩である。

この地区では新しい一歩がいくつも生まれている。すでに2009年に国道398沿いに入谷の農産物や加工品を土日に直売する「入谷サン直売所」がオープンしている。



最近では2015年12月には、53歳から83歳までの農家の女性たち6人が、ビーンズクラブを結成して、農家の作業小屋を作業場として利用し、「まめ菜工房」（2016年1月本営業）が発足した。休耕田に大豆を作付けし、納豆、豆腐、きな粉を造って、販売している。小さな6次産業化である。

この工房では「ビーンズクラブと入谷の里でottoふ作り」というプログラムを通年で実施している。また震災後のことだが、元役場職員だった女性が代表となり、入谷の女性たち十数人で、2013年3月24日、南三陸生活研究グループ「ぬくもり工房」を立ち上げ、豆、米、野菜など原料はすべて南三陸産のものをを使って、みそと山菜や葉わさび漬け物、梅干しやしそ巻などを手作りしている。出資金は仲間を出し合い、公的な補助金を使った工房を新設した。商品は町のお祭りなどに出品するほか、登米市のス

ーパーでも取り扱われるようになった。

女性たちが主体となって活動し、自分たちの収入になることを目指している点で、旧来の農家の女性たちの働き方とはひと味違った新しい方向性が出て

おり、なにか今後の農家の女性たちの生き方の可能性、新しい農業の形を感じさせる動向である。さんさん館ではリンゴ狩りのイベントもやっているそうだが、その運営もやはり女性ということである。

7. 山林の管理

南三陸町の山は杉が多い、しかし手入れはあまりよくなされているとはいえない様子である。戸倉地区も杉が多いが、土地の人に尋ねると人手がないし、コストに見合う収益が期待できないので、放置された状態になっているという。入谷も歌津も似たような状況のようだ。間伐を行えば、ずいぶんと山の様子もちがってくると思われるのだが、なかなかそうもいかないようだが、震災後すこし変化が起きてきているようだ。きっかけは津波で浸水した杉の木を伐採して、震災後の施設再建の建材に利用してからのことかもしれない。間伐した雑木を小片（ペレット）にしてペレットストーブの燃料にする試みが始まり、県も町もそれを推進するようになった。現在病院と役場で使っており、今後公共施設や学校でも使用を開始するということである。当面ペレット年間一千トンの消費が目標ということである。森林資源の保存と管理の一環として期待できる試みである。これを契機に、南三陸町の山林がグリーンツーリズムの資源として見直され、かつ建材や燃料源として有効に活用されるようになれば、一石二鳥であろう。

ちなみにエコ環境に関して、南三陸町は2014年3月に「バイオマス産業都市」に指定された。バイオマス都市構想の実施に向けて2、3年前からアミタの協力を得て、実証実験を行ってきた。2015年10月16日、大雄寺に近い下保呂毛に「南三陸BIO」が開所した。南三陸町内から排出される生ゴミ・屎尿処理汚泥などから、液体肥料、電力を創出するリサイクル工場である。南三陸町の自治体業務のアウトソーシングとしてアミタが事業主体として運営する。上述の廃材・間伐材のペレット化もアミタによる実証実験の結果に基づくものである。この実験は総務省の「緑の分権改革」被災地復興モデル事象調査予算を用いて行われた。この二つが今後十年間続けられる事業の二本柱である。資源・エネルギーの地域内循環システム創出の試みが震災復興事業の一環として進められている。地域の資源を生かして省エネ・省コストによる産業振興と町づくりを目指している。10年後どのような成果となって表れるか楽しみにしつつ、経過を見ていきたい。

8. NPO

入谷のさんさん館の校舎裏の建物で活動していた宮城大学地域連携センター「南三陸復興ステーション」は2015年3月で活動を終了した。そこで統括リーダーをしていた鈴木清美さんに久しぶりに会った。その後一般社団法人南三陸研修センター・南さんりく学びの里「いりやど」の監事を務めるとともに、特定非営利活動法人「びば！！南三陸」の代表理事を務めている。どんな活動をしているか尋ねてみた。二つの施設はともに入谷鏡石の国道398沿いにあっ

た。



いりやど 2015年12月28日

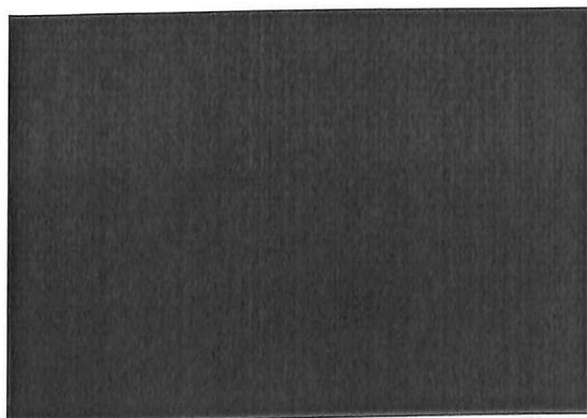


びば！！南三陸 2015年12月28日

「いりやど」は、震災後にできた宿泊研修施設で、学生の研修、企業向けの研修プログラムなどが行われるほか一般向けの宿泊も受け入れている。また大学生の支援を受けて小中学生の補習プログラムも行われている。運営の方向性が「さんさん館」とはややおもむきを異にしているので、両者の競合の度合いは低そうだ。むしろ入谷地区にこうしたカラーの異なる二つの宿泊・研修施設があることの利点を認識した方が今後のグリーンツーリズムにとって有意義であるように思われる。



エコ平板 2015年12月28日



2013年秋から高齢者活動の一環として「エコ平板」づくりをポータルセンターや仮設住宅集会所で行っていたが、2015年6月に「びば！！南三陸」をNPOピースウィングズジャパンの協力のもとに開設し、高齢者活動の場として、エコ平板作成、料理教室、視察研修など各種講座を運営している。土日以外は何らかのプログラムが開かれている。そのほかに障害者（児童・成人）の預かり支援などを行っている。現在職員2名のほか理事・監事6人で運営している。

集まってくる人はシルバー人材センター当時の会員が現在の主力メンバーだが、新しい高齢者メンバーも加わっているという。入谷地区のみならず登米の南方の仮設住宅からも来る。町民バス（災害町民バス）を使ってかなり離れたところからもやってくるという。戸倉、歌津、志津川からも通ってくる。平成の森での出張活動も行っているという。いわば中高年者の余暇活動の場となっており、一講座につき500円の参加費を戴いている。参加者は一回15人くらいだという。また講座の講師の多くは地域の人々だということである。

施設のある場所はもともと田んぼだったところだが、休耕田となった遊休地を借りし、ピースウィングが建物を建て、譲り受けたということだ。

NGOピースウィングズジャパンと南三陸町の「おらはのまちづくり支援事業」のサポートのほか、今年度は赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」宮城県「みやぎ地域復興支援助成金」「宮城県地域復興担いNPO等支援事業補助金」などの支援を受けて活動をしているという。

集まってくる人々は、家が残っている人や被害を受けなかった人が半分くらいで、むしろ一緒にふつうに楽しむことで、かえって心を軽くしているようにも見えるそうだ。まだ被災地を見ることができない人や現実を受け入れられない人もいる。しかし今度、病院ができたので、いやおうなく被災地（志津川）を通ることになるので、しだいに現実を受け入れるようになるかもしれないと、最近の印象を述べてくれた。

鈴木さんの願いは、この場所が、ここで学んだことを教えたり伝えたりすることができる場になっていくことだという。また地域の先人の話を聞き、今を思い、考え、伝えていくそういう場にしていきたいと抱負を述べた。

面白いことを教えてくれた。町の境はすべて分水嶺で、水が山（森）から田畑へ、そして海へ流れ、みんなつながっていると。含蓄のあることばである。

志津川の平地はおおた埋め立てられる。水尻川

沿いの竹河原、その下に中瀬町（八幡川の中瀬の意味）、さらに海側に低地を埋め立てた塩入、塩浜、汐見、本浜、埋立地の南町とあったわけだが、いずれも地名の由来が地形から推測できたが、嵩上の後はわからなくなるだろう。因に鈴木さんは旧東山公園のあたりに生まれ育ったそうだ。

旧町名とそのいわれを書いた案内版の作成掲示を提案したところ行政（教育委員会）も前向きな姿勢を示しているとのことである。

むすび

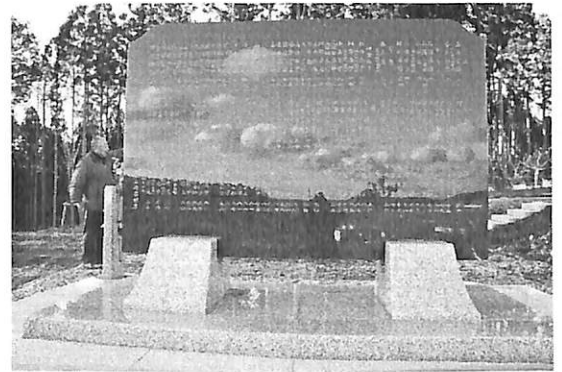
この夏、歌津伊里前の歌津駅の裏手の山の頂に観音像、震災慰霊碑、それに「忘れないあの日を」という碑ができた。山の頂からは伊里前と伊里前湾が一望できる。建立したのは最後の歌津町長牧野駿氏³である。建築家・安藤忠雄氏を中心となって呼びかけている「鎮魂の森」活動からの寄付金を基に、牧野氏の私有地を開放して「南三陸町歌津地区の鎮魂の森」として整備された。慰霊碑には震災で亡くなった歌津地区の被災者全員の氏名が刻まれている。伊里前湾を望みながら3.11とその犠牲者を思い、鎮魂の祈りをささげるにふさわしい場所である。いずれ花木が根付き、大きくなれば、花見の名所になるであろう。

伊里前の人々は、ここに登って湾を眺め、碑に刻まれた被災者の氏名を見て、これで亡くなった者の無念も少しは救われる思いがすると感謝の念をしめたそうだ。たしかにそういう思いはここに立つとよくわかる。この場所は、いざ津波来襲というときには、避難場所になることも想定して造られた。

おそらく南三陸では3.11の最初の慰霊碑であろう。志津川では、高台は移転のための造成工事中、平地は嵩上げ工事中であり、震災後いつのまにか防災庁舎が震災遺構兼慰霊碑的な存在になってしまい、それをどうしたらよいかの結論もはっきりしないまま、慰霊碑建立のタイミングを定めかねて現在に至っているといつてよいのかもしれない。しかしいずれ考

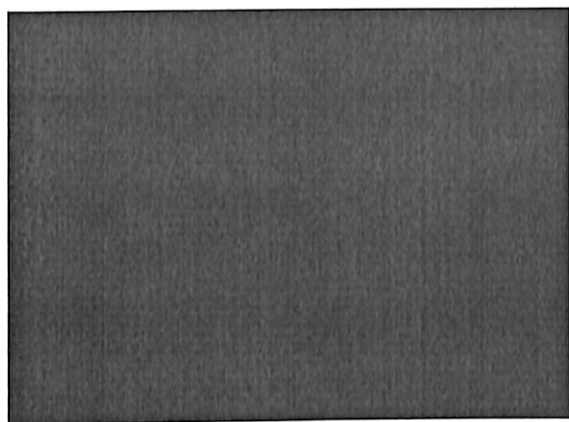


歌津観音 2015年12月27日



被災者慰霊碑 2015年12月27日

3 牧野駿氏は、旧歌津町と旧志津川町が合併し南三陸町が誕生する2005年10月1日まで10年間歌津町長を務め、新しく南三陸町長が決まる同年11月4日までは職務代行を務めた。2011年3月11日の震災の後、同年8月にRQ市民災害救援センターが、牧野氏からの聞き書きを行なった記録『牧野駿 結う人』（RQ聞き書きプロジェクト編、2012年5月発行）がある。牧野氏の生い立ちからはじまり、町長就任に至る経緯のほか、伊里前契約会のなりたち、震災当時のことや歌津の復興構想など、歌津の過去と現在を考えるうえで貴重な記録となっている。



えなければならないことではある。どのような形にするのか。歌津に慰霊碑ができたとなると、志津川、戸倉の地区ごとの慰霊碑、そしてそれとは別に町全体の慰霊碑をつくらないと具合が悪いであろう。と



歌津震災慰霊碑から伊里前湾 2015年12月27日

もかく南三陸町民の多くの人が、虚心坦懐に、この歌津の慰霊碑にお参りにきて、そのうえでどうしたらよいかを考えるのがよいのではないだろうか。